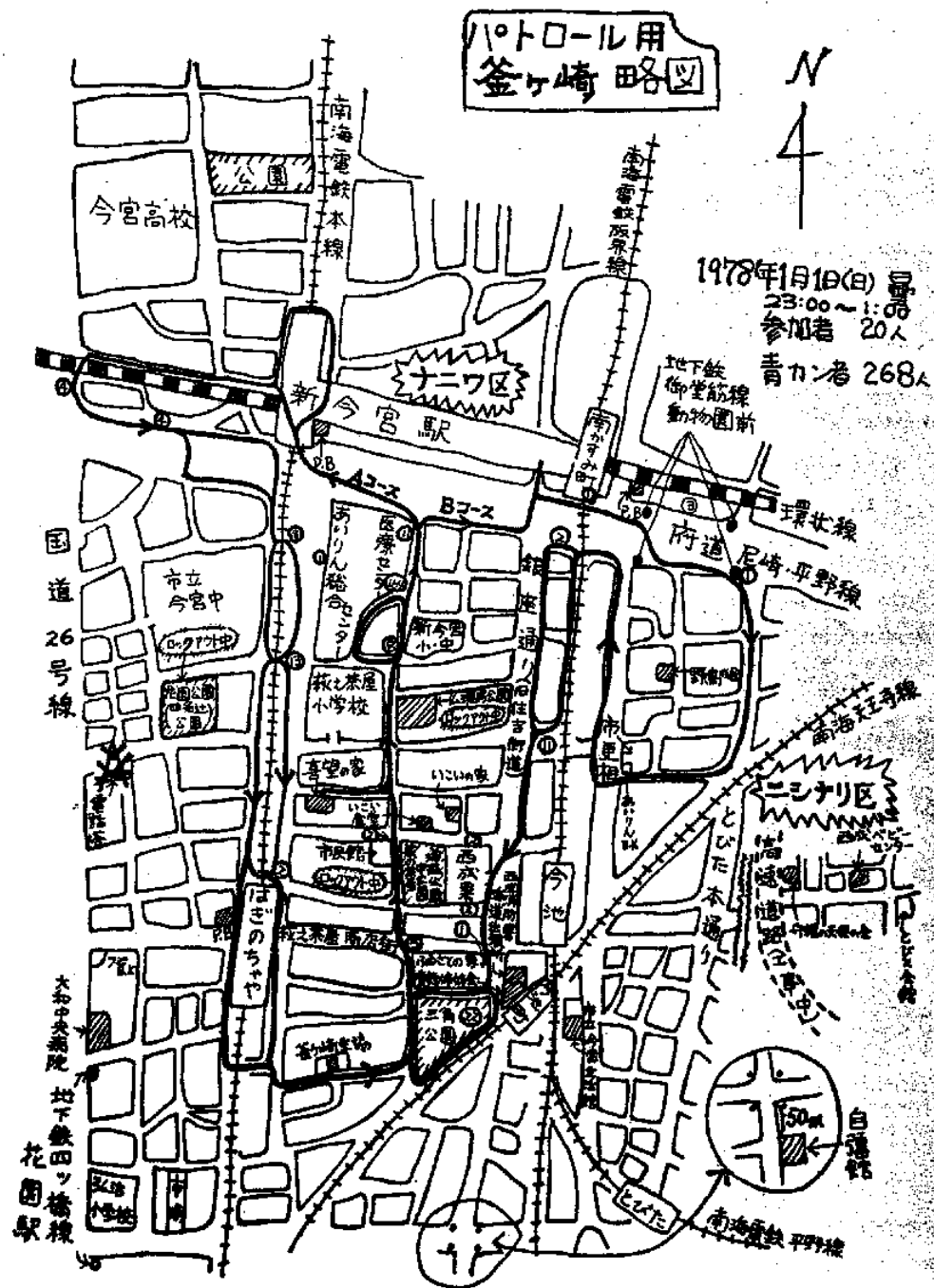


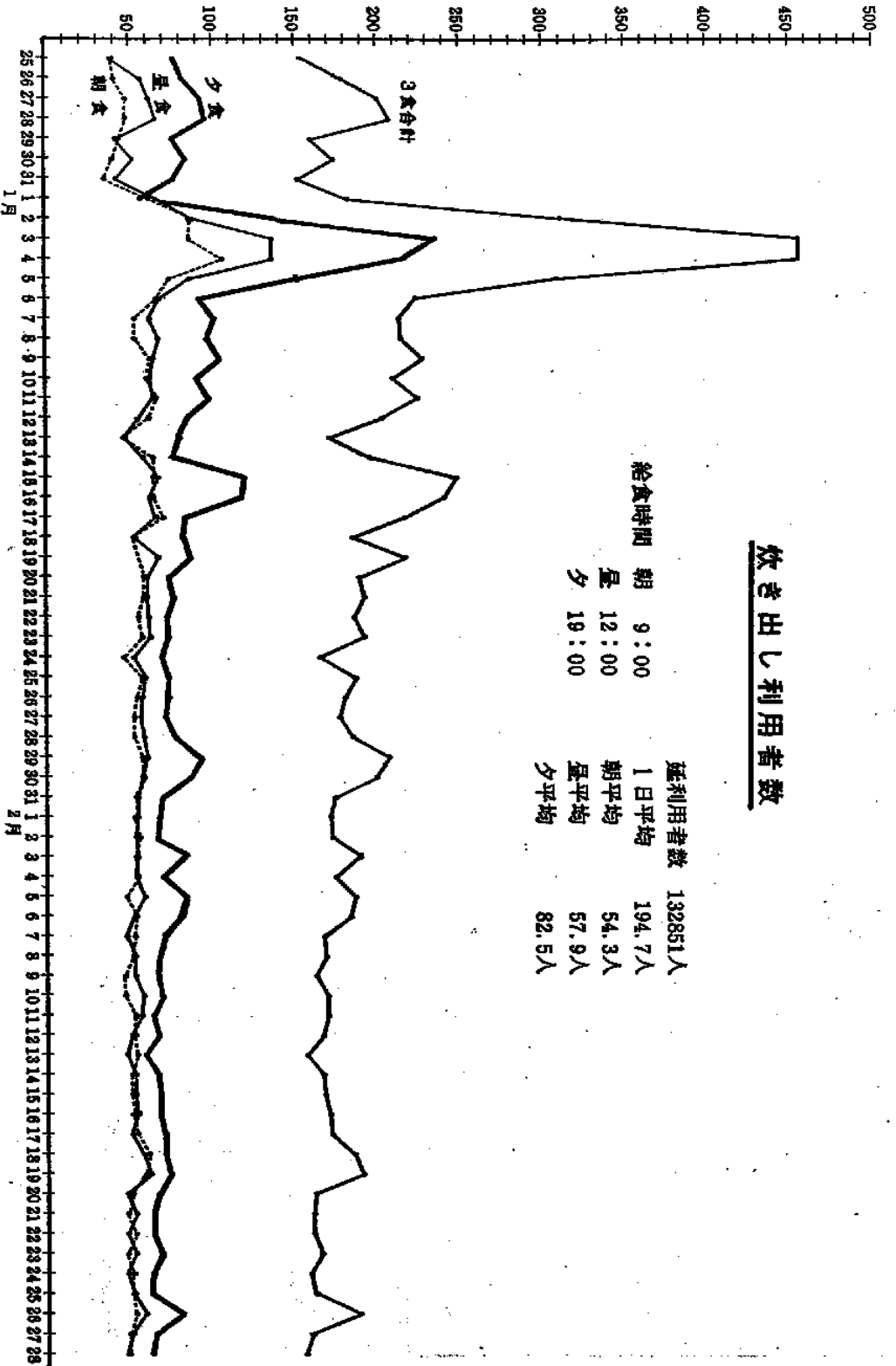
釜ヶ崎 1977年冬



キリスト教釜ヶ崎越冬委員会

炊き出し利用者数

延利用者数	132851人
一日平均	194.7人
朝平均	54.3人
昼平均	57.9人
夕平均	82.5人



K・J法による

越冬を中心とした釜ヶ崎の問題

はじめに

私達の越冬支援は全国の様々な人々（個人・団体）の様々な物心両面の協力の上に成りたっています。

そこで、一応越冬が終わった時点で、報告書を作成し、支援の内容の報告と、新たな問題提起を行ってきました。昨年の報告書は、釜ヶ崎の現実をよりわかりやすくする為に写真を多く用いて編集されました。

しかし今年の場合は、昨年と支援の内容に大きな変化がなかわりに、問題の複雑さという点においてはより多くの事柄が出てきました。今年はその事をふまえて、問題の構造を明らかにし、出来れば、今後の取り組みに生かせる実態資料的な要素を加えて編集できないかということで、K・J法を試みたわけです。

K・J法とは、川喜多二郎氏によって一応集められた方法で、K・Jとは氏の名前によるものです。

この方法は、複雑な問題の整理や構造を明らかにするのに有利とされ、知識、経験、観

察、出来事などに基づいて、一つの事柄を一枚のカードにまとめ、それらの個々の材料がおのずから語りかける事に即してまとめていくという方法です。

私達が行ったのは、一応の訓練を受けた人の指導によるのではなく、解説書に基づいて行ったので不十分極まります。また、表を読むには多少の根拠を必要としますが、是非とも、釜ヶ崎の問題をトータルに理解していただく為に、参考にしていただきたいと思います。

なおこれらの表は、表1が全体のいわば目次にあたります。これに基づいて、個々の問題について展開したものが表2以降になります。例えば、表1の左上「青カンの実態」の内容を展開したのが表5であり、表1の「青カンの種類」をより詳しくしたのが表5の左上「青カンの種類」になるわけです。

個々の問題については、材料の多い少ないがあり、正確とはいえませんが、全体と個々の問題を反復して見てもらうことにより、問題の構造がより明らかになると思います。

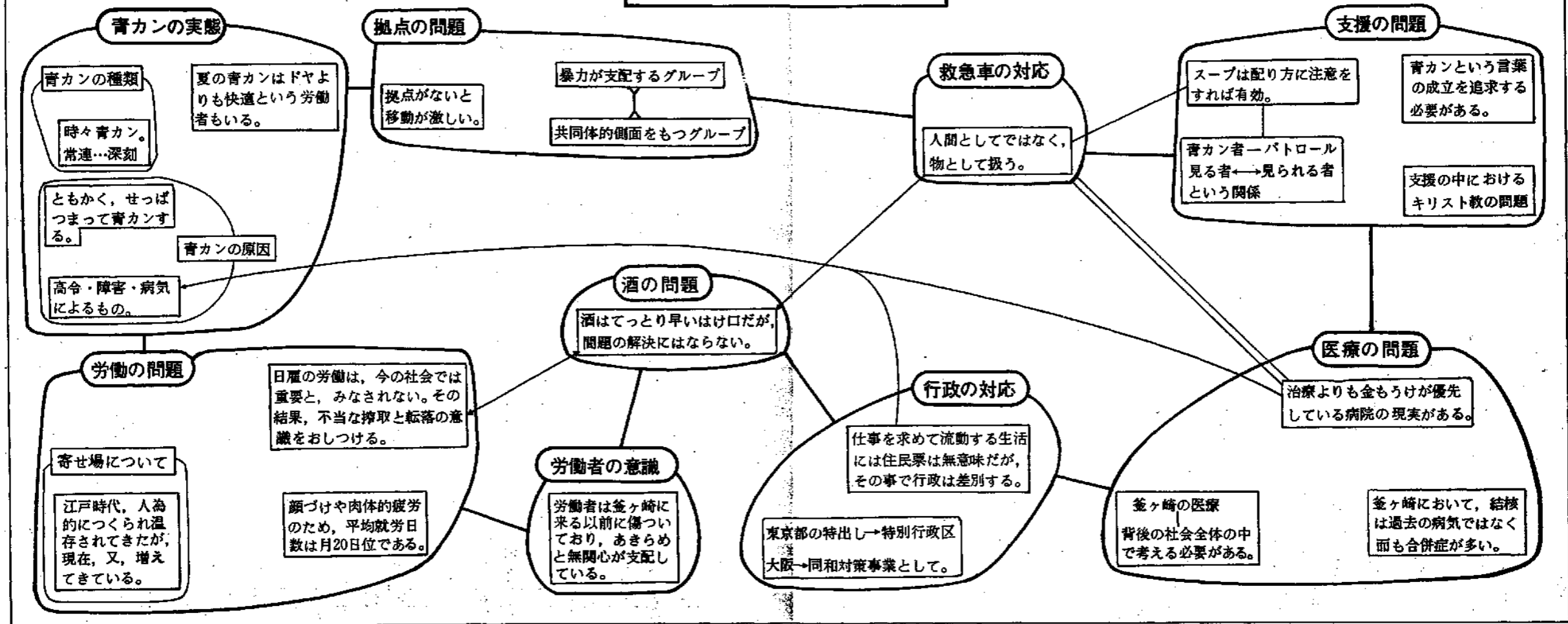
表目次

表1	表2-表9のインデックス図解	14
表2	医療の問題	16
表3	酒	16
表4	労働者の意識	17
表5	青カンの実態	18
表6	支援の問題	20
表7	支援の中におけるキリスト教の問題	21
表8	労働の問題	22
表9	行政の対応	24

凡例

—	相互に関係がある。
→	生起の順、因果関係を表わす。
↔	相互に因果的となる。
↯	相互に反対。
囲い線	関係があり同類である一群を示す。
—	同じ要素をもつ。

表2~表9のインデックス図解



上記の表は、いわば全体の表の見出しに相当する部分です。ここにあるのが一応、越冬に関連して出てくる釜ヶ崎の問題です。個々の問題の内容は、後の表と解説を見てもらうことにして、ここではこれらの問題が、どのようにからみあっているかという点について少し見てみたいと思います。

この中で、労働・酒・医療の問題は特に密接な関係を持ち複雑な構造を作り出します。日雇の労働はよくいわれるように、汚れて、きつく、危険な、しかも賃金は安い仕事です。それに現在の社会では労働の評価が必要に応じてなされるのが少なく、ましてその労働に従事する人々がどのような条件のもとで生活しているか注意を払われることもあまりありません。

その為に労働者は、労働の苦痛と疎外感からいきおい酒の力をかりて気分をまぎらすこととなりますが、飲酒は習慣性を持ち、悪質な労働条件とあいまって病気やケガの割合も非常に高くなるのが実状です。

しかし、飲酒の為に受診・入院ができない。入院しても飲酒の習慣性の為に療養に専念できなくて自己・あるいは強制退院といったケースが少なくありません。それに加えて、病院の設備・待遇の問題もあります。

もう一つ重要なのは、孤独感と、病気を直した後の展望の問題です。いろいろ考えても結局生活の場を釜ヶ崎に求めざるをえないと結論を出さざるをえないとき、全てが無駄に思えてくるのは、わからないことではありません。「大阪社会医療センター」はわざわざ「社会医療」といっていますが、ここには様々な含みがあります。病気の状態は単に機能の障害、あるいは病原菌に犯されているという点ではないからです。

釜ヶ崎では、一つの問題もよく見るとき、必ず二つ、三つの問題が重なっています。労働→酒→医療の問題は、どれもが発発点であり、問題の行きつくところであるように思えます。

今述べたのは単純化したほんの一例ですが、それにまた、付随した様々な問題が加わりま

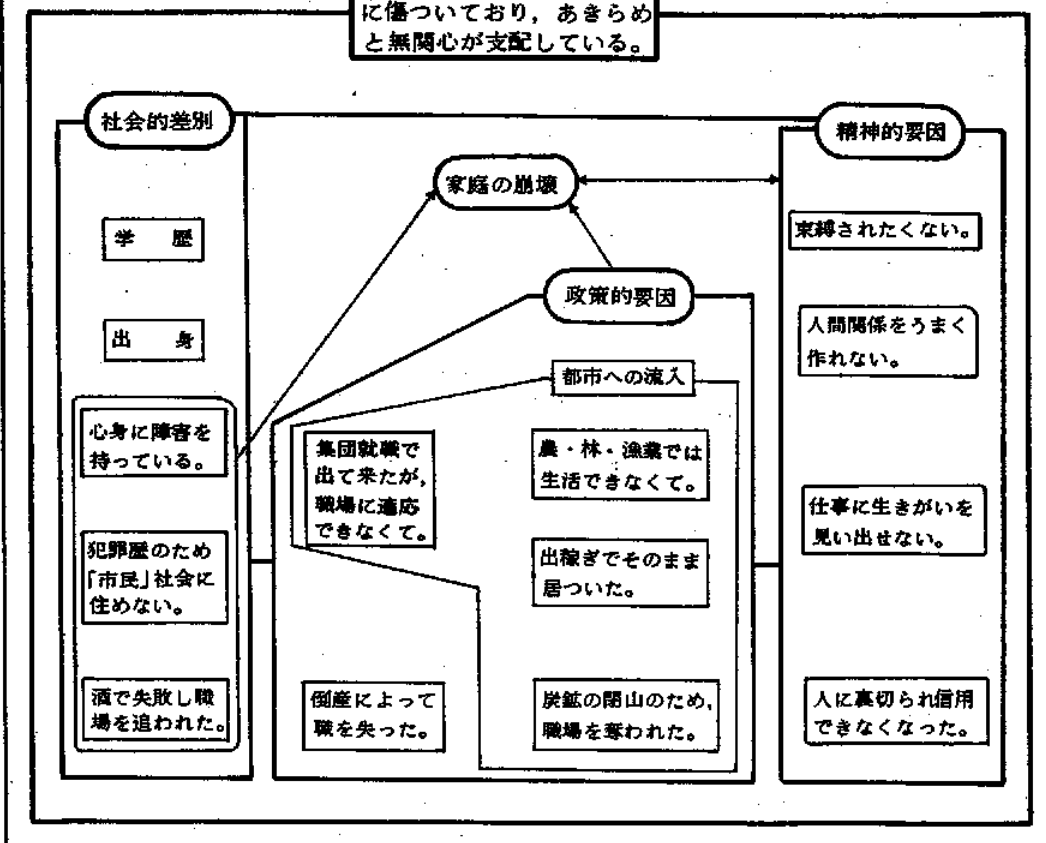
す。

一見、出口も希望もないようですが、それでも、苦痛を苦痛と感じるところには、解決へと至る道も残されていると考えます。

労働者の意識

表 4

労働者は釜ヶ崎に来る以前に傷つており、あきらめと無関心が支配している。



労働者の意識

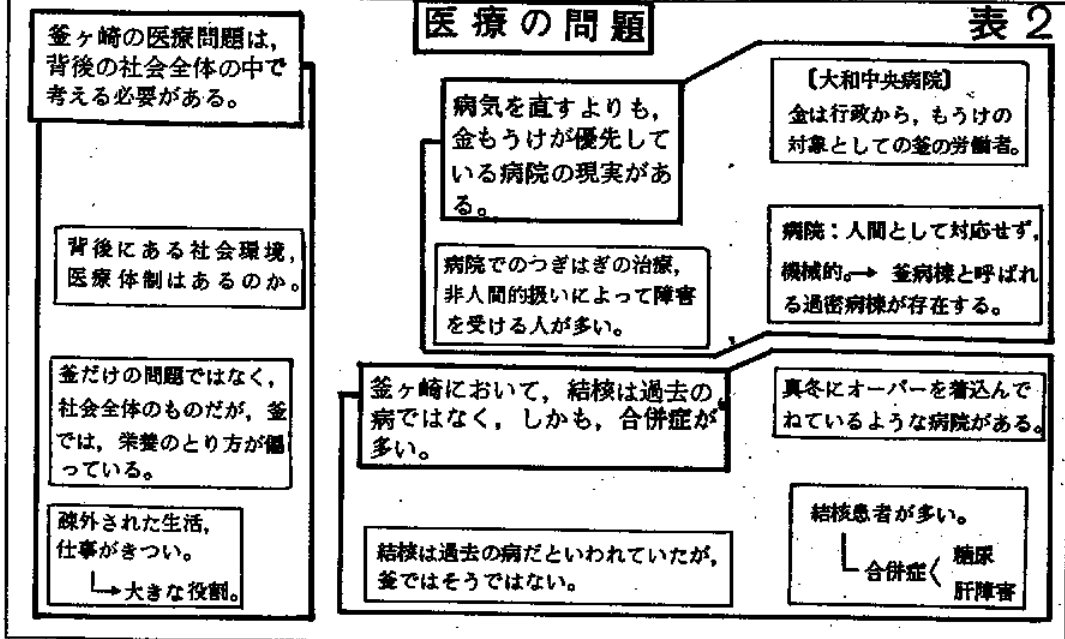
日雇労働者の多くは農・林・漁業の意図的な破壊、エネルギー転換による炭鉱の閉山等によって生産の場を奪われ、大企業の末端で必要な単純肉体労働者として政策的に都市へ追われた人々である。国家的エンクロージヤーの中で、人々は為す術もなく翻弄されるばかりではなく、外的な変化に伴って、人間の関係性も同時に破壊される。都市での利潤追求第一の関係への不適応や経済的要因による家庭の崩壊はよくみられる。そして日雇労働や釜ヶ崎での生活は物心両面での疎外をますます深めていく。

酒

日雇労働者の約10%はアルコール中毒だといわれている。約一三〇軒の立飲み屋が林立し、路上に倒れている労働者の大半は飲酒している。ところが、問題行動を起こさなくても、この酒がはいっていると受付けてくれない。ここに問題がある。アルコール中毒は個人の問題であるよりは社会問題だ。飲んではいけないとわかっていても飲まざるをえない問題が釜ヶ崎にはある。酒を飲まないでも楽しくやって行ける地域をつくり出さない限り問題の解決はない。

医療の問題

表 2

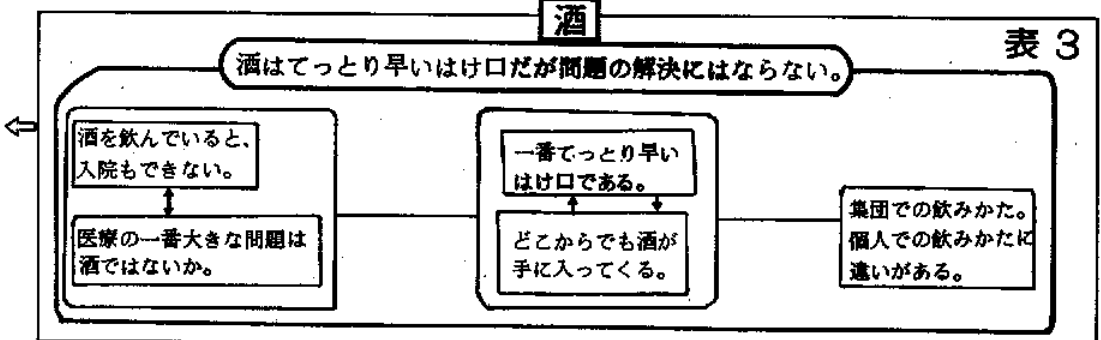


医療問題

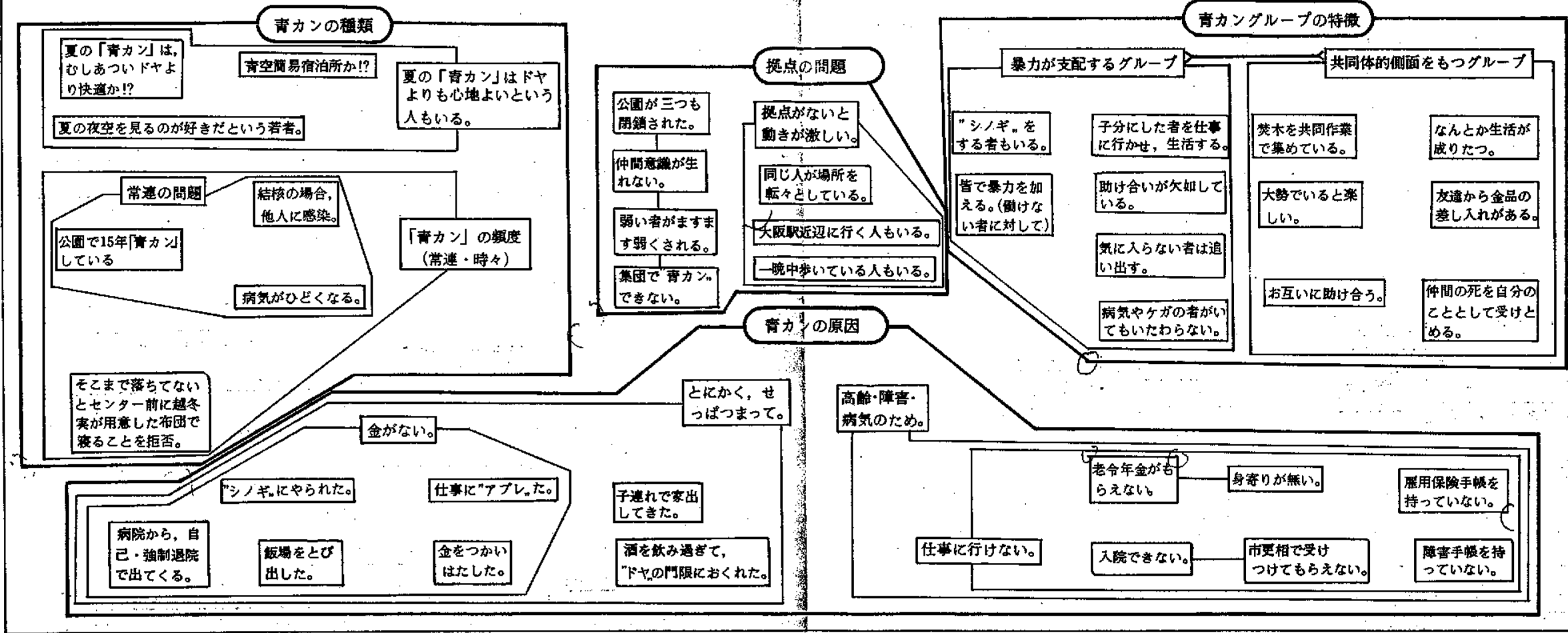
今日、日本の医療制度の矛盾がいろいろな機会に指摘されているが、釜ヶ崎で医療問題にかかわるとき、その典型的な矛盾に出会うことができる。医療はもはや「金もうけの手段」以外の何ものでもない。そこには、人間や生命を大切にしようとする思想などみられない。病む日雇労働者は、金もうけのよき道具であり、完治見通しがたたなければ、入院はおろか治療さえも受付けられない現状である。救急車に乗ったが、途中でカンジューズを渡され路辺におろされたという例さえある。医療の退廃というよりも資本主義社会の医療の最も悪い面がでている。また、労働者の中には、日本ではもはや過去の病いとされた結核がこままた圧倒的に多い。それは、栄養と環境から来る。感染性の結核患者が野放しである。さらにアルコール中毒の問題があるが、これも決して「酒」の問題ではなく、酒を飲んで一時的に解決しようとする労働現場の問題とも深く結びついている。医療は、ここでは身体の治療に終始してはならない。

酒

表 3



青カンの実態



青カンの実態

夏場の「青カン」はともかく、冬場の「青カン」は想像を絶するものがある。今年のように、公園を拠点として使用できない状況のもとでは、なおさらである。

「青カン」している労働者を大別すると、一時しのぎに「青カン」している人と、それ以外に方法がなく、しかたなしに長期にわたって「青カン」生活を送っている人とに分けられる。後者の労働者の場合、高令、障害、病気のいずれかに該当する人が多く、二つ、あるいは三つとも該当する労働者も少なくない。この労働者達は、客観的に見て仕事のあるなしにかかわらず、働くことはもはや非常に不可能であり、真に福祉の手が差しのべられてよい人達である。

しかし現実には、これらの人達は、むしろ自ら福祉の恩恵にあずかることに対して頑なであり、いさぎよしとしない。長い間つちかってきた自分のことは自分でする、又、自分以外頼る者はないという生活態度からであろうか、それとも、これまでに行政の福祉にあずかり辛い経験を持っているからであろうか。たしかに、実態調査を行なった時でも、市

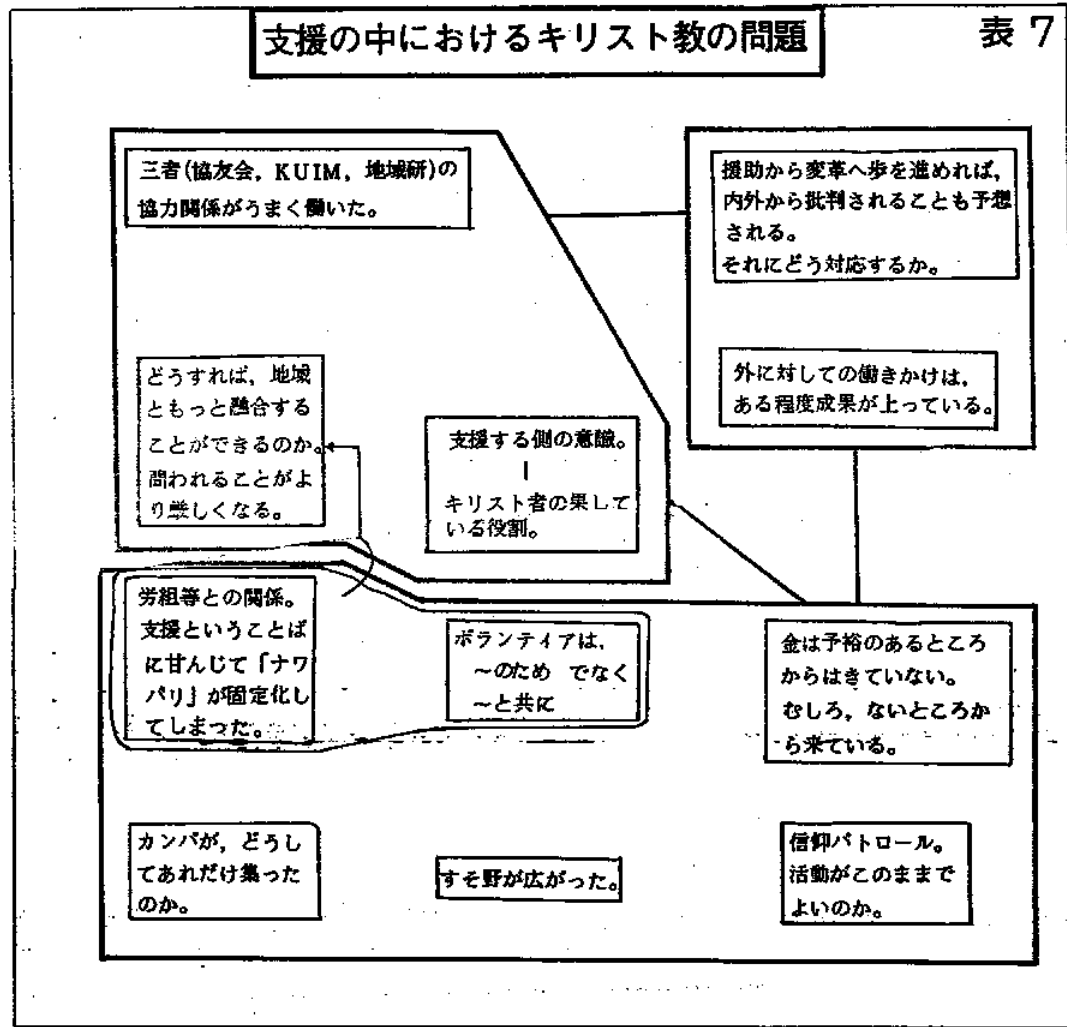
立更生相談所に行ったことがあると答えた人は少なくない。察する所、おそらく両方であろう。私達もまた現在のところこの現実の前には沈黙するしかない。せめて、もう少し労働者の意識のヒダの一つでも読み取った、キメのこまかい福祉対策ができないものかと願うばかりである。

「青カン」をしている労働者のもう一つの特徴は、グループをみるときに、お互に体を寄せ合うようにして助け合っているグループと全く逆に、弱者の中より強者が、より弱者を支配するグループがあることである。この時にこそ、拠点としての公園があれば、できるだけ一ヶ所に集って互に助け合う共同生活ができるのにとつくづく考えさせられる。医療センター前の夜間の布団だけではどうしても不十分であり、たき火に投げこまれたり刃物で刺されたりという事件もあつたからである。それにしてもパトロールの中で死者を発見したときの痛みを私達は決して忘れることはできない。

非惨さばかり強張したようだが、どんなに困難な状況の中でも生き続けようとする、労働者の強い意志に、私達も私達の生きざまを重ねたいと思う。

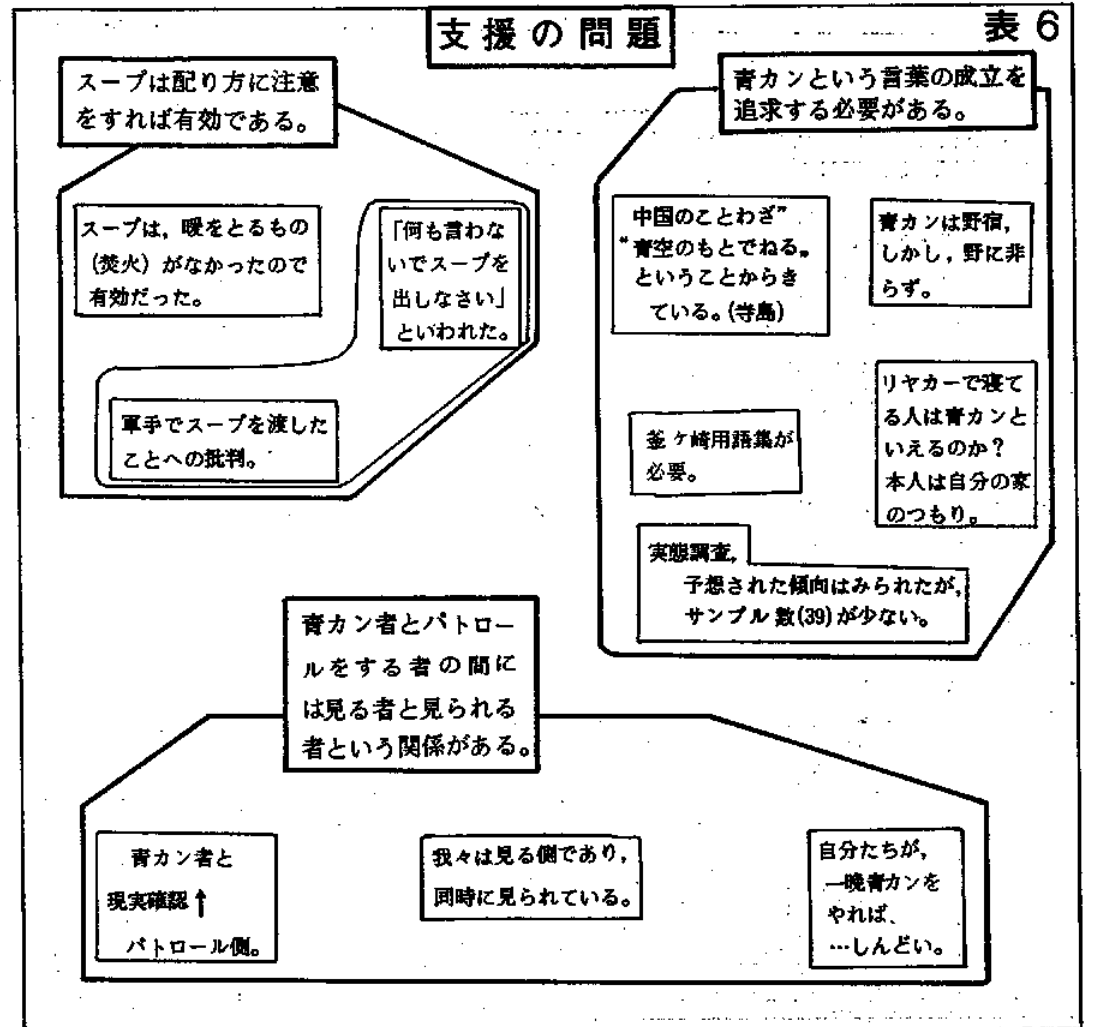
支援の中におけるキリスト教の問題

表 7



支援の問題

表 6



支援の問題

具体的な支援の一つとして今年もパトロールに力を入れた。パトロールの意味については様々な事が言える。先ず、そのままの状態であれば、死んで行ってしまう人を救済する事が何と言っても第一の目的である。

しかしそれだけではなく、労働者一人一人バラバラにされている状況の中で、労働者と労働者、あるいは、支援する私達を通して、他者と共に生きる人としての関係をつくる事も大きな意味を持っている。

同時にこのことほど、困難なことではない。関係性とは相互的なものであるはずなのに、現実には、「見る者」と「見られる者」という一方通行の関係ができてくる。又パトロール慣れして、つい重要な事を見逃してしまうことも出て来る。この壁はどうやって越える事ができるのであろうか。

今年、公園がまるつきり使えなくて暖を取る手段が少ない為スープを配る事にした。単に配ると言っても結核患者が多い現状では紙コップを一回く使い捨てにするという方法によってである。

支援の中における

キリスト教の問題

私達の越冬に対する関わりを「支援」ということ限定して来たのは、何と言っても、問題の解決を必要としている、労働者自身、そして、労働者の組織「グループ」が中心にならなければならないと言ったことであつた。越冬が終わってふり返って見る時、この事の重要性は変わらないにしても、それだけではすまないこともあることに気づかされる。

例えば、炊き出しについては資金をカンパする事とし、実際の炊き出しには参加しなかった。しかし炊き出しを継続させ、より充実する為には大変な労力が必要とされるが、今年、越冬の炊き出しは人手が足りなく、又調理する場所も狭く、せつかくの資金、野菜のカンパも充分生かす事ができなかった。今後は充分検討した上で、必要な事は担って行くという事も考えなければならぬ。

もう一つは、「支援」に止まらざるを得ないという事は、私達の地域への「根づき」の弱さから出ているという事である。キリスト教の信仰から言っても、「一の為」ではなく、「一と共に」を基軸にしながら、もっと「労働者と共に」やれる事の追求がせまられている。

労働の問題

日雇の労働は、管理社会では重要な仕事と認められず、その結果、不当な搾取と転落したという意識を押しつける。

士から離れる方が社会的地位が高いという価値観がある。

労働者の結果への障害となっているのは、今の世の中が管理社会で個人に展望がないからである。

日雇労働者は、労働集約型の一流企業の下請の仕事に行く。

顔づけや疲労の為に、日雇の平均就労日数は月20日位である。

顔づけは企業の側が若くて、頑健、文句を言わない労働者を選択することである。

世話役などはよく仕事に行く。

日雇の仕事は月に20日も行ければよいほうである。

日雇は身分保障がない。

仕事をやっている人とやれない人が分断されている。やっている人の将来がやれない人であるだろうという展望のなさ。

労働者1万7,8千人のうち、
職安 2500
労働センター7600~9300
直行 3500~5000
計: 1万3千~5千

中間搾取の典型として、大阪府が工事発注する時8000円の賃金が、労働者には4500円前後しか支払われない。

労働の疎外の一環として、自分が主役だと考えられない。作った物が自分に還ってこないということがある。

労働者の中にも、一般社会から転落したという、屈折した意識がある。

寄せ場は江戸時代に人為的に作られ温存されてきたが、現在また増えてきている。

寄せ場という名の労働市場の語源は、江戸時代、刑の決った人間があつめられたことからくる。

新しい寄せ場が新大阪駅の裏にもできた。

資本主義社会における釜ヶ崎の位置づけは国営飯場である。

労働の問題

釜ヶ崎は、労働問題を抜きに考えることはできない。かりに、労働問題抜きに釜ヶ崎の問題にしたとすれば、それは誤りと断定してもさしつかえない。

釜ヶ崎はスラムではない。日雇労働者の町である。

日雇労働者は、日々、就労と失業の不安にさらされている。今日のように不況が進行する時、その最初の犠牲者が、釜ヶ崎の労働者であることは、オイルショック以来の就労統計がよく物語っている。好況時の三分の一から四分の一ほどしか、就労は保障されていなかった。その状況は、いままも変わらない。釜ヶ崎に、不況は最も早くあらわれ、最後まで残る。いま一つの、特色は、好況、不況にかかわらず、一二月から二月にかけては、最も就労の機会が少ない季節である。とくに年末年始は、それが著しい。この就労の少ない季節と不況が重なりあうところに、越冬の問題がある。越冬もまた労働問題抜きには語れないし、越冬を「福祉の枠」の中で考えるとすればやはり過ちを犯すことになる。

日雇労働ではさらに、中間搾取が典型的にあらわれる。ときには元請が支払う労働者一人あたりの労働単価の半額ほどしか、労働者に支払われていない。たとえば、竹中工務店が請負の際にはじき出す労働者一日あたりの賃金一万円が、実際に働く者には五千円にしかならない、ということである。元請―下請―孫請さらにはひ孫請といったところで中間搾取がなされる。手配師とはまさにこの下請構造の中に出て来る存在で、職安法違反者なのである。しかし、手配師も必要悪だという国の政策として野放しにされている。またこの下請制度、手配師制度の中をたくみに暴力団が泳ぎまわり、その資金源としている。

しかし、一般には、このような日雇労働のもつ矛盾には目を向けず、「愚け者」のように思われているのが日雇労働者である。むしろ、そのような無関心が、日雇労働にかかわる諸々の不当な「制度」を温存していることにもなる。

次ぎ次ぎに生み出されていく日雇労働者の存在を考えることは、決して日雇労働者のことだけでなく、わたしたちの生活しているこの社会についても根本的に考え直す機会ではないだろうか。

行政の対応

仕事を求めて流動する生活には住民票は無意味だが、行政はその事で差別する。

東京都が「特出し」をするのは、首都という特別行政区だからである。大阪は同和対策事業として行っている。(道路・公園等の清掃の一部)

労働者が住民票を持たないのは、生活が流動的で定着できないからである。

釜ヶ崎が議員などに取り上げられなかった理由の一つに票にならないということがある。

労働者は寄せ場があるからここにいるのであって、行政には住民であるという意識がない。

行政の対応

釜ヶ崎が何故差別されるかという事を考えて見る時に、その一つに、私達は、定着して生活している者と、流動して生活している者との対立がある事に気づかされる。

その「証し」としてあるのが「住民票」である。行政に対して何かを言っていく時、「住民票」のある、なじの影響は少なくない。

しかし良く考えて見る時、通常釜ヶ崎で一生住みたいと思う人が何人いるだろうか。できる事なら異なる所で異なる生活をしたと思う人が多いにちがいない。自らが現在住んでいる所で、さらに生活を築いて行きたいと思う時にこそ住民登録をしようという意識も生まれるし、又有効でもあろう。

この「住民」あるいは「市民」でないという事に対しては大阪府・市が決めつけるものだけではない面もある事はある。大阪市の担当の課が、釜ヶ崎への対策を議会に提出しても、議員達が、こぞって反対するというようになっている。ここには、「住民票」——「選挙権」という極めてリアルな政治力学がある。公園の開放に対して反対する勢力も、これらの議員につながるころの「地域住民」達である。

それにしても行状が釜ヶ崎の労働者に対して取る態度は、「義務」を果さない者には「権利」がないというだけでなく、いかに「管理」するかという発想が極めて強い。そのためにますます、両者の溝は深まるばかりである。

大阪市などの場合、「越冬対策」の為に金を使っていないかと言えば、必ずしもそうではない。しかしそれはほとんど有効に使われていない。例えば、臨時無料宿泊所の受け付けの際のものしい警備、そして宿泊所内でのガードマンの警備費用等に大半が費やされる。それにしても、例年越冬が行なわれる、東京―山谷、横浜―寿町、名古屋―笹島、そして大阪のそれぞれが革新の自治体であるということはどういふことなのであろうか。

このうち、東京都は山谷の越冬対策として、例年、「特出し」と呼ばれる特別公共事業を興しているが、他のところは皆無である。大阪の場合、大阪市に対して東京並みに、公園・道路・墓地の清掃を特別公共事業として日雇労働者に提供したらどうかというところ、府の管轄の所が多く、大阪市独自の判断ではできないと逃げてしまう。

いつになれば、管理的な発想では何ら問題は解決しないことに気づくのだろうか。